

「基礎と土台」の関係は築年代の古い伝統民家では、礎石に柱または束が立つ「石場建て」であり、現代工法のコンクリート布基礎と一体化した土台がない。リフォームにあたり、以下の2種の工法を原則的な指針とする。但し全体の整合性から、基礎工法を混在させない。

A. 土間打ち工法

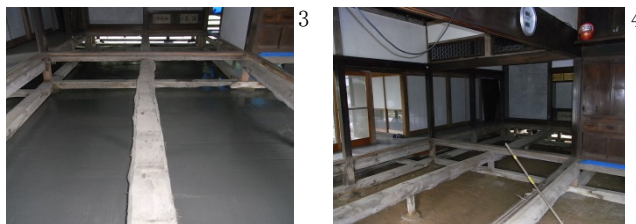
古民家は石場立てなど、土台がある場合でも高さが地面に近いために長い期間には土に埋もれる箇所がある。そこからシロアリや腐朽菌による被害が発生する。耐久性のためには、建物をもち上げコンクリート布基礎をつくりたいが、古民家は平屋建てで延床面積が50坪以上に及ぶものがあり、基礎工事が大きな負担となってしまうことが多い。そのような理由から、床下の環境を良好に保ち、腐朽菌とシロアリの食害から守るため、土間打ちコンクリートの施工法がある。

この工法は、石場建ての改善手法に属し、ジャッキアップせずに施工可能なため、費用も抑えられる。布基礎工法でないため、伝統工法に準じて足固め貫や指物類で補強し、また柱・梁・指物などで上下左右が囲まれた部位での耐力の確保や対応を図る。なお、諸条件から礎石とその周囲に限定したコンクリート補修の手法を別に示しているので参照されたい。

B. コンクリート基礎工法

コンクリート基礎を新設する場合には建物をジャッキアップして、作業可能な高さにあげて施工する。(揚家) 曳家を行って建物を一時的に移動させ、基礎が完成後、元に戻す場合もある。基礎コンクリート工事は、新築の基礎工法と同様であるが、古民家には大黒柱や独立柱などがあり、図面と現状を照合して基礎施工図を作成する。建物を基礎に乗せる作業は一か所ごとに確認を行い柱の柄を確実に土台に落とす。土台はアンカーボルトにて基礎に固定する。建付け調整を確実にしてから軸組の工事に入って行くようにする。

A. 土間打ち工法による工事の流れ



B. コンクリート基礎工法による工事の流れ



基礎が打てる高さまで家全体をもち上げコンクリート基礎をつくる



←敷地に余裕がある場合は、曳き家により建物を移動し基礎の完成後に元に戻す方法がある。



新しい土台を設置し、土台敷きを行い、柱の柄をよく確認したうえで、キチッと納めていく。手間のかかる作業だが耐久性と強度を保つために重要な作業である。

